

## 手銭美術館蔵『手銭さの子詠草』 翻刻と紹介

野 本 瑠 美  
(島根大学法文学部)

### 摘 要

手銭美術館（島根県出雲市）が所蔵する『手銭さの子詠草』は、手銭家七代当主の妻・さの子の和歌詠草である。本稿では『手銭さの子詠草』を翻刻、紹介する。

キーワード…手銭さの子、『手銭さの子詠草』、和歌、手銭美術館

### 解説

出雲市大社町の手銭美術館（注1）が所蔵する『さの子詠草』は、手銭家七代当主有頼の妻・さの子（一八一三～一八六二）の和歌四四首をまとめた小家集である。なお外題には「詠草」とだけあるが、手銭美術館所蔵目録で付されている整理書名に従い『手銭さの子詠草』と呼ぶ。

手銭さの子（注2）は今市の直良家の出身で、文政九年（一八二六）、手銭有頼に十四歳で嫁いだ。夫有頼とともに、中臣典膳や田中清年、富永芳久らに和歌や俳諧、狂歌を学び、嘉永六年（一八五三）の『出

雲国名所歌集』をはじめ、安政三年（一八五六）『丙辰出雲国三十六歌仙』、同四年『花のしづ枝』、同五年『戊午出雲国五十歌撰』等の出雲で編纂された諸歌集に歌が選ばれ、安政四年の『丁巳出雲国五十歌撰』で跋文を執筆している。さの子の和歌や俳諧等の著作、さの子手沢本は手銭家に数多く残され、さの子の文芸活動を知る重要な手がかりとなっている。

『手銭さの子詠草』は、さの子自筆の家集で、四四首の和歌が春（六首）・夏（八首）・秋（九首）・冬（五首）・恋（七首）・雑（五首）・祝歌（四首）の順に整然と配列されている。さらに、四季歌は季節の推移順を意図した配列となっており、たとえば春歌は「元旦うぐくひすを聞」歌（1）から始まり、桜の歌を経て、初夏も間近な「苗代」題歌

(6) で結ばれている。

本詠草四四首のうち四三首はさの子晩年の家集『朝宵草』（注3）にも収載されている。本詠草と『朝宵草』の対応を表で示す。

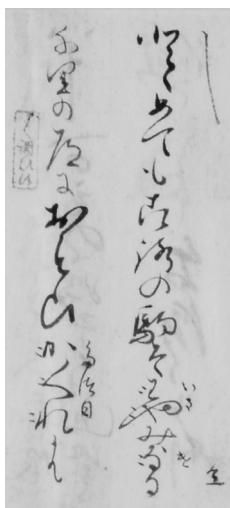
さの子詠草	朝宵草 (部・番号)	さの子詠草	朝宵草 (部・番号)
1	春・8	23	秋・169
2	春・17	24	冬・234
3	春・16	25	冬・220
4	春・27	26	冬・226
5	春・19	27	冬・227
6	春・23	28	冬・235
7	夏・84	29	恋・280
8	夏・90	30	恋・273
9	夏・95	31	恋・274
10	夏・97	32	恋・268
11	夏・102	33	恋・266
12	夏・106	34	恋・263
13	夏・107	35	—
14	夏・113	36	雑・344
15	秋・152	37	雑・345
16	秋・156	38	雑・346
17	秋・158	39	雑・348
18	秋・162	40	雑・336
19	秋・161	41	雑・324
20	秋・165	42	雑・330
21	秋・170	43	雑・331
22	秋・172	44	雑・329

『朝宵草』はさの子自筆の家集で、和歌狂歌等四三一首を春・夏・秋・冬・恋・雑の部立に基づいて収めている。各部の内部は『さの子詠草』のような歌内容に基づく整然とした配列をとっておらず、おそらくは素材となった歌稿や詠草類から抜き出した歌を部立別に分け、各部に順次増補していったと思しい(注4)。

『朝宵草』の増補はさの子が没する文久二年(一八六二)まで続いたが、『さの子詠草』との共通歌は『朝宵草』各部の前半に集中しており、かつ、『さの子詠草』と『朝宵草』の歌順はほとんど一致しない。以上を勘案すると、『さの子詠草』は『朝宵草』から抜き出されたも

のではなく、それぞれ同一の資料(歌稿や詠草類)をもとにしながら、別個に(おそらく『さの子詠草』は『朝宵草』より前に)まとめられた家集と考えた方がよいのではないか。

なお、『朝宵草』に収載されていない詠草35番歌は、さの子ら数名による詠歌を集めて添削し点印を押した「兼題詠草」(注5)に収められており、さの子の和歌と判断できる。



「兼題詠草」では、元は

と、めてもこゝろの駒そはやみなる千里の道におもひかくれは  
であつたさの子の和歌に添削が施され、

と、めてもこゝろの駒そいさみける千里の道におもひたつ日は  
と修正されており、『さの子詠草』の本文は添削後の本文と一致する。

『さの子詠草』と『朝宵草』の共通歌を比較すると、以下のような  
仮名遣いの違いが見られる。

おほえて(詠草・1) — おほへて(朝宵草・8)

あふひ(詠草・14) — あをひ(朝宵草・113)

身にそふ(詠草・37) — みにそう(朝宵草・345)

をしへ(詠草・38) — をしえ(朝宵草・346)

いずれも『さの子詠草』の仮名遣いが歴史的仮名遣いとしては適切で

ある。仮名遣い以外でも、たとえば

せきいる、(詠草・6)―せきいれる(朝宵草・23)

は「入る」の活用形としては『さの子詠草』が正しい。

詞書や題にも差異が見られる。『さの子詠草』25番歌には「時雨」という題が付されているが、『朝宵草』には題が付されていない。また、以下のように『さの子詠草』の題の表記の方が通例に則している。

落葉似雨(詠草・26)―似雨落葉(朝宵草・226)

久忍恋(詠草・29)―恋久忍恋(朝宵草・280)

後朝恋(詠草・32)―後朝(朝宵草・268)

また、『さの子詠草』の方が『朝宵草』よりも、和歌内容に即した具体的な複合題を付しているものも見られた。

水上蛩(詠草・10)―蛩(朝宵草・97)

田面蛩(詠草・11)―田蛩(朝宵草・102)

雨中鹿(詠草・19)―鹿(朝宵草・161)

一方『朝宵草』では「恋の心」(266)「初恋」(263)と記載するのに対し、『さの子詠草』では「題しらず」(33、34)とする部分もあった。

題の具体化(複雑化)や題の有無については元の詠草の表記との比較が必要だが、総じて『さの子詠草』の方が表記の形式としては整えられている。

『さの子詠草』は仮綴という簡易な装訂ではあるが、表紙の署名、朱筆による添削が施されていること等を勘案すると、指導者に添削を依頼するために、さの子が過去の自詠をまとめたものと推測される。ただし、朱筆による添削結果は、明らかな誤字脱字の修正を除き、『朝宵草』の方には反映されていない。

さの子の歌稿や添削詠草、短冊類は手銭家に数多く残されている。

手銭美術館蔵『手銭さの子詠草』翻刻と紹介(野本瑠美)

さの子が自詠をどのように選び、まとめ、残そうとしていったのか、詠草類と二つの家集とを比較していくことが今後必要であろう。

## 注

(1) 二〇二二年四月に「手銭記念館」から「手銭美術館」に改称。

(2) 手銭さの子の事跡については、下記の論考を参照した。佐々木杏里「手銭さの子と杵築文学」(『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、二〇一〇年)、芦田耕一「江戸時代の出雲歌壇」(島根大学法文学山陰研究センター、二〇二二年)、田中則雄「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」(『調査研究報告』三三三、国文学研究資料館、二〇一三年三月)、佐々木杏里「手銭さの子と女性の文芸活動」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、二〇一八年)。

(3) 『朝宵草』翻刻と歌番号は下記に拠る。拙稿「手銭美術館蔵『朝宵草』翻刻と紹介」(『山陰研究』一六、二〇二四年三月)

(4) 注3解説参照

(5) 『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業―平成26年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書』(公益財団法人手銭記念館、二〇一五年)所収のシンポジウム記録「シンポジウム 江戸力―手銭家蔵書から見る出雲の文芸」に久保田啓一氏による「兼題詠草」の紹介や解説が収められている。

## 書誌

手銭美術館所蔵 写本仮綴一冊

〔美術館資料番号〕 六七九

〔表紙〕 縦二二・六×横一六・四cm。本文共紙

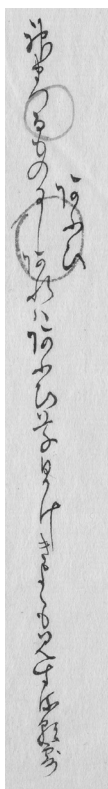
〔外題〕 表紙中央に直書きで「詠草」〔内題〕 ナシ

〔丁数〕四丁

〔備考〕表紙左下に墨書で「出雲杵築／手銭白三郎妻／さの子」とある。一面の行数は十一〜十二行程度。和歌一首一行書き。朱による添削や記号等の書人が見られる。

凡例

- 一、翻刻の字体は可能な限り底本どおりとした。ただし文字の大小・字配りは必ずしも忠実ではない。
- 一、便宜上、和歌の冒頭に通し番号を付した。
- 一、改行位置は可能な限り原本の通りにした。
- 一、各丁片面の終わりに当たるところに「」を付け、（ ）内にその丁数及び表・裏（オ・ウ）を示した。
- 一、朱筆のミセケチ記号は「ヒ」で統一した。
- 一、破損で判読不能な場合は□で示した。重ね書きは上の字のみを翻刻した。
- 一、朱の傍記は、可能な限り原本の体裁を残すよう翻刻した。墨の傍記は（墨）と示した。本行本文への朱筆による書入は【】で示した。
- 一、歌本文に重ねて書かれた円形の記号は翻刻しなかった。当該記号が見られるのは14番歌で、「つる」の上に朱の円、「にしあ」の上に墨の円が描かれている。



翻刻

- 1 春日つとなれもおほえて鶯のときめかしたるけさの聲かな  
元日うくひすを聞  
春月
- 2 うめかをる軒はに霞む月かけは花にゑひたるけしき也けり  
花
- 3 たちおほふ霞の袖もにくからす花を、しめる心とおもへはつくしはヒヒヒヒ  
社頭桜
- 4 ねきことのかなふしるしか神かきの桜は花のゑみひらくなり  
山吹
- 5 款冬の下行水にすむ蛙花のあはれをなけてやはある  
苗代
- 6 せきいる、水に心のゆたねまく賤かしわさはいとまなけなり  
首夏  
(1丁オ)
- 7 神祭るときや来ぬらん榊葉のみとりす、しく見ゆるそよくけふかな  
早苗
- 8 菅笠の雫の田ゐは【○】降雨くものはれまもまたす早苗とる也  
蛩
- 9 こもり江の汀の蘆のみしか夜をおもふふしとや蛩とふらん  
水上蛩
- 10 をちこちを飛かふよりもあはれさはみくさにすかる蛩也けり  
田面蛩
- 11 ふきわたる山下風のす、しくもくる、たのみにほたるとふなり  
五月雨

12 人とはぬかた山さとのさみたれは身もくちぬへくおもほゆるかな  
〔1丁ウ〕

夜五月雨

13 さみたれはいやふりそひぬ久かたの月はいつこの空にやとれる

あふひ

14 神まつるものにしあれはあふひ草日かけきよくも見する朝露

七夕

15 彦ほしの船手をいそく浪の上は心してふけ天の川風

女郎花

16 あたし名のたつをはしらてをみなへし露のなさけになひくとすら

ん

虫

17 松むしをともときかすは来ぬ人をうらみんことの数やまさらん

鹿

18 山住みのうきをかたらん友もなしつまとふしかの聲の外には」

〔2丁オ〕

雨中鹿

19 雨そくをの、しのはらわけかねてつまとふしかの夜々に鳴らん

待月

20 つかのまもまつとおもへは山のはをさしいつる月のめつらしきかな

な

深夜月

21 野に山にならぬ思ひをうつしつ、ふくるしらて月をみしかな

九月十三夜

22 長月は□のみける□をしとおもふ今宵のかけもかたふくもの

を

紅葉

23 あかねさす日かけもうとき深山ちにまはゆきものは紅葉也けり

雨中紅葉

24 見し花のうらうへならん此頃の雨にいろますみねのもみち葉」

〔2丁ウ〕

時雨

25 夕しくれたちぬれましと旅人のころもの関を今やこゆらん

落葉似雨

26 袖ぬれてたと見しは夢路にてうつ、も雨とちる紅葉哉

27 わすれては雨かとおおもふ谷川の水ますはかりちるもみち哉

歳暮

28 なにくれといとなむわさにくれの一夜のとしになりける哉

久忍恋

29 とし月のおもひを袖にせきあまる涙そ恋の命也ける

待恋

30 あひ見なはうらみやさきにきかせまし待夜かさぬる暁のかね」

〔3丁オ〕

31 来ぬ人の心はさのみにくからて更行かねのうらめしき哉

後朝恋

32 朝露におきわかれてもわかせこか身にそふはかり残るおもかけ

題しらす

33 君ゆゑに恋のやつことなる我はあたる道も行かへりつ、

34 いかにして茨からたちわけゆかん今さへたとる恋の山口

寄駒恋

35 と、めても心の駒そいさみける千里の道におもひたつ日は  
書

36 はまちとりかくまであとをつけつゝも猶いにしへにたちかへりな  
く

37 見るたひにそのおもかけそなつかしき身にそふはかりのこる言の  
は」(3丁ウ)

38 たらちねのをしへのふみしなかりせは世はうちはしのわたりうか  
らん

うかれ女扇をかさしたる

39 くれ竹のふしもさためぬうかれめは誰にあふきの風といはまし

熊

40 たちこもる岩根木かく(愚)かくれ住熊はなか月の輪をかけたのまん

寄道祝

41 ぬは玉の夜の道さへまとはぬは御代の恵のひかりなりけり

寄松祝

42 とことはにあふけはめにも心にもあかぬは松のみさほ也けり

寄鏡祝

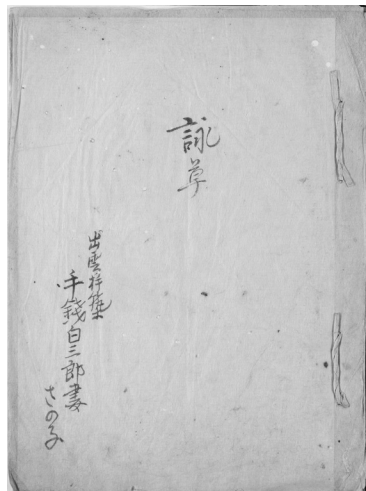
43 玉くしけふたこゝろなき御代なればかゝみのかけそくもらざりけ  
る

いはひの歌とて

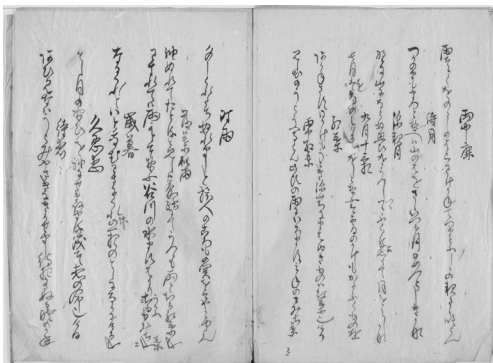
44 君か代を何にたとへん鶴亀も千代万代のかきり社あれ」(4丁オ)

〔参考図版〕

1. 表紙



2. 2丁ウ〜3丁オ



〔付記〕 貴重なご所蔵品の調査をお許しくださった手銭家の皆様、調査にあたり様々に御教示を賜った手銭美術館学芸員佐々木杏里氏に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎研究と公開方法の開発に関するプロジェクト」（二〇二五～二〇二七年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

# A Transcription and Introduction of “TEZEN Sanoko Eiso” in the Tezen Museum Archives

NOMOTO Rumi  
(Faculty of Law and Literature)

## [Abstract]

This paper presents a transcription and an introductory study of “TEZEN Sanoko Eiso,” a manuscript in the collection of the Tezen Museum (Izumo City, Shimane). The manuscript consists of waka poems by Tezen Sanoko, the wife of the seventh head of the Tezen family, and dates to the late Edo period.

Keywords: TEZEN Sanoko, waka poetry, Tezen Museum